２０１４．７．１７

世界史の始まり「ユーラシア遊牧騎馬民集団」

吉田洋一

序：これまでの世界史と東西交流

・教科書の世界史は西洋史と東洋史の継ぎはぎ
　「四大文明」――ギリシャ・ローマ／秦・漢――西欧・ゲルマン世界／隋・唐

・東西交流史は　シルクロード――大航海時代

・しかしユーラシアの北方の東西に広がるステップ地帯には太古より東西交流の大ルートがあり、前 2000 頃の印欧語族の西・南への拡散のルートとなり、騎馬民族の活躍の舞台となって世界史の舞台回しのカナメとなってきた。

１．騎馬民族の成り立ちと騎馬民集団（連合国家）の成立・

・前 9500 頃チグリス・ユーフラテス地区で麦の栽培　　前 7600 頃ヤギ、羊の家畜化

・前 5500 頃カスピ海北岸で農耕牧畜　　前 4000 頃半狩猟、半農耕・牧畜の定住集落

・前 3500 頃メソポタミアで車輪の発明　　前 2000 頃西アジアでスポーク車輪と戦車

・前 2000 以降中央ユーラシアより印欧語族の拡散、アナトリアへヒッタイト人、ヨーロッパへギリシャ人・ケルト人・ゲルマン人、前 1500 頃からインド、イランへアーリア人

・前 900 頃中央ユーラシアの残存集団が南方のオアシス都市定住民と北方のステップ遊牧民に２分化

・前 800 頃中央ユーラシアで遊牧騎馬民が誕生（キンメリア、スキタイ）

・前 500 頃ペルシャ帝国の北方にスキタイ連合国家が君臨し、前 200 頃中国、秦帝国の北方に匈奴帝国が君臨する。

2. スキタイ連合国家（ギリシャ時代）

・前 800 頃のエニセイ河源流付近（トゥバ）のアルジャン遺跡から、先行の「キンメリア文化」と共に「スキタイ文化」の青銅器動物文装飾品、馬具、武器が出土している。

・最初の記録は前 680 頃のアッシリア王の年代記に現れる。　前 620 頃メディア王国を破り、パレスティナ地方まで侵略した。

・ギリシャのヘロドトスの「歴史」（前 450 頃）によれば、スキタイは中央アジアの遊牧民であったが西に移動し、先住のキンメリア人を追い払い黒海の北岸地域に定住した。スキタイの東にはサウロマタイ人、その東に別種のスキタイ人、更にウラル山麓にはアルギッパイオイ人、その東方（カザフスタン）にイッセドネス人（＝マッサゲダイ？）がおり、そこまでたどり着いたギリシャ人がいたという。

・前514古代ペルシャのダレイオス大王がスキタイに侵攻するも、騎馬軍団の退却戦法により撃破された。
・スキタイは動物意匠に特徴づけられる金属器文化を生み出し、その文化にはギリシャ芸術影響を受けたものも含まれ、西はハンガリー・ドイツから東はモンゴル高原、更に雲南省にまで及んでいる。
・スキタイは前334のアレキサンダー軍は撃退したが、前260頃東方から移動してきたサマルタイに圧迫され。衰退した。
・スキタイに替り黒海北岸を含む南ロシア草原を支配したサマルタイ連合体はローマ帝国にも侵入したが、４ｃに東から襲来してきた「フン族」に圧迫され、吸収された。
・西ユーラシアでは遊牧騎馬集団を中核とする政治連合体が相次いで形成されたが、東方からの新来者により中核集団が交替し、連合体の組み換えが行われるパターンが続いた。

３．匈奴帝国（秦・漢時代）
・前350頃西方の騎馬技術が東方に伝わり、東方の騎馬民族の勢力が急拡大した。以降中国地区北部の戦国時代列国は長城の築造を始めた。
・匈奴の名は前漢・司馬遷の「史記」前318に初めて出てくる。匈奴はモンゴル高原に興り、その東方には東胡、西方には月氏が勢力を張っていた。
・前230頃匈奴は南下してオルドス地方にまで進出したが、中国地区を統一した秦始皇帝により前215撃退される。始皇帝は列国の長城をつなぎ万里の長城を建造する。
・秦の統一は11年で崩れる。匈奴では冒頓単于が勢力を蓄え、東胡を滅ぼし、月氏を撃ちオルドスを奪回して更に漢（劉邦）・楚（項羽）の覇権争いの中、中国東北部に進攻した。
・前202漢は楚を破り中原を平定。前200冒頓単于は漢を攻めて撃破した。漢高祖（劉邦）は屈辱的な和睦を結び、実質的に匈奴帝国の属国となり、この体制は70年続いた。
・匈奴帝国は多種族の連合体であり、現北京近辺に本営を置き、モンゴル高原を中心に東は朝鮮半島北部から西は青海・チベットを含み天山方面までを勢力下とした。
・前139前漢の武帝は匈奴攻略のため、月氏との同盟を策して張騫を派遣した。張騫は途次匈奴に捕えられたが10年後に脱出し、西走した月氏の興した大月氏国に至った。張騫は同盟は果たせなかったものの、大宛の汗血馬の情報を持ち帰る。
・前129武帝は匈奴との全面戦争を挑み、常に漢が仕掛ける形で戦争は50年に及ぶ。
・前104武帝は大宛の汗血馬を得るため、李広利の遠征軍を派遣し、大宛はじめ西域諸国を勢力下に治め、交易を始めた。これが匈奴への大打撃となり匈奴は急速に弱体化した。
・それまでの西域では匈奴の使節は単于の「一信」という信用状を所持していれば諸国が食事と替え馬を供して西方まで旅することができた。匈奴はオアシス国家の通商を保護する見返りに、納税の義務を課しており、これを失うことは安定した財源と物資の供給源

を失うことを意味した。

・この 50 年戦争により漢も疲弊し、武帝の死後講和が成立して共存の時代となる。

・前 50 頃匈奴帝国は東西に分裂し、東匈奴は漢との関係を維持するが、西匈奴は西に勢力を移し、やがて消滅する。

・後 8 漢は外戚の王莽にとって代わられ、15 年間新王朝となる。新は匈奴に強硬策をとり、全面戦争に踏み切ったが、大敗し匈奴帝国の再隆盛をまねいた。

・新が崩壊して、後漢が興ると旧に復して和平共存が保たれるがこの間、東匈奴・後漢両帝国共に内部崩壊に向かう。

・50 頃東匈奴は内紛から南北に分裂し、南匈奴は後漢に臣従する。一方北匈奴はモンゴル高原に留まるが、100 頃に南匈奴、後漢連合軍に攻撃され西方に移動し、２ｃにはシル河下流に達するがその後の消息は不明となる。

４．五胡十六国と鮮卑族

・220 後漢王朝は黄巾の乱で崩壊し、魏・呉・蜀の三国時代となる。265 晋が魏を乗っ取り、280 に中国を統一するが、中国北部（華北）では周辺の民族が自立し勢力を伸ばす。

・鮮卑はかつて匈奴に滅ぼされた東胡の末裔であり、頻繁に漢に侵入し敵対してきた。90 頃には北匈奴の弱体化の隙をつき、モンゴル高原に侵入して勢力を伸ばした。

・南匈奴は魏・晋に従属していたが、316 晋を滅亡させ、中国地区は「五胡十六国」の時代（304～440）に入る。五胡とは匈奴、羯、チベット系の氐と羌、鮮卑であり、これらが華北に次々と 16 の国を作り興亡した。

・この時代は中国地区の分裂時代である一方、周辺諸民族の大融合時代であり、新しい漢民族が誕生して中国地区の文化、言語、生活風習等大きく変転した。

・鮮卑族の中で 300 頃から台頭してきた拓跋部は 315 に中国東北部に代国を建国し、386 魏（北魏）と改称し、華北に進出する。

・440 北魏が華北を統一して「五胡十六国」は終わり、中国地区は華北の北魏と、晋の流れの華南の東晋が並立する「南北朝時代」となるが、実質的には北魏・隋・唐と続く鮮卑・拓跋氏王朝の幕開けである。

５．フン族（ローマ帝国時代）

・北匈奴の消息が不明となって 200 年後、376 黒海西北岸にいたゲルマン系の西ゴート族が東方から現れた強力な騎馬軍団フン族に打破られ、ローマ帝国との国境のドナウ川北岸まで逃げ、大多数はドナウを渡りローマ帝国の庇護を求めた。

・フン族はこれより先、350 頃ボルガ川を越えてアーリア系のアラン族を服従させ、更に東ゴート族を襲い配下に加えている。

・ローマ帝国内に入った西ゴート族は、帝国の対応への不満からトラキア地方で反乱を起

こし、これにフン族や東ゴート族も加わった。　当時ローマ帝国は東西二人の皇帝により共同統治されており、この地区は東に属していた。　377 ローマ軍とゴート族の大会戦がおこなわれ、ローマ軍は大敗し、東の皇帝は陣没した。

・395 ローマ帝国は東西に分離する。この頃、フン族の騎馬軍団はガリア地方（北フランス）、カフカス山脈を越えて帝国の属州にも侵入している。

・422 フン族がトラキアに侵入し、東ローマ帝国の首都コンスタンティノーブルにまで脅威を与えたので、帝国は毎年 350 ポンドを支払う条件で和平条約を結ぶ。444 アッティラがフンの支配者になり、帝国に脅威を与え続け支払いを 2100 ポンドまで引き上げさせた。

・450 アッティラは現ハンガリーに拠点を置き、西ローマ帝国の勢力下のガリア地方に侵攻する。侵攻を前にローマ帝国はガリアの西ゴート族と手を結び、451 両軍は激突するが勝敗は決しなかった。

・アッティラはその後、イタリアに攻め込みポー川の平原まで進み、ローマに向うが、教皇レオとの和平交渉に応じ、あっさりとイタリアから引き上げた。

・453 アッティラは不審の死を遂げ、フン族集団はその後急速に衰退する。

まとめ：

・ユーラシア平原に前 800 頃誕生した騎馬民族集団は、キンメリア、スキタイに始まり、その騎馬技術が東方に伝わり匈奴帝国が誕生した。匈奴は中国地区の秦・漢帝国と対峙し、旧漢族最後の王朝である晋帝国にとどめを刺した。中国地区王朝はこれより「鮮卑・拓跋族王朝（北魏・隋・唐）」に替ることになる。
フン族が西進した北匈奴の末裔かどうかの確証はないが、北匈奴の西進が、遊牧民の西への大移動を引き起こし、ゴート族などが西ローマ帝国に入り込み帝国を倒壊させ,ヨーロッパの新時代（ゲルマン時代）を開いたことは事実である。

以上

＜参考文献＞

・ユーラシアの東西　杉山正明　日本経済出版
・世界史の誕生　岡田英弘　筑摩書房
・匈奴　沢田　勲　東方書店
・スキタイと匈奴遊牧の文明　林　俊雄　講談社
・ウマ駆ける古代アジア　川又正智　講談社
・東アジア民族の興亡　大林太良・生田　滋　日本経済新聞社
・アーリア人　青木　健　講談社
・内陸アジア地域からの世界史　野間英二　朝日新聞社＜参考文献＞
・遊牧民から見た世界史　杉山正明　日経ビジネス文庫
・アダムの旅　S. ウェルズ　バジリコ株